

# 本文章已註冊DOI數位物件識別碼

## ▶ 時間副詞に関する一考察－「いきなり」を中心に－

doi:10.29714/TKJJ.200712.0002

淡江日本論叢, (16), 2007

作者/Author： 江雯薰

頁數/Page： 17-26

出版日期/Publication Date：2007/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200712.0002>



*DOI Enhanced*

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



## 時間副詞に関する一考察

## — 「いきなり」を中心に —

江雯薰

## 1 はじめに

現代日本語においては、「いきなり」は、「とつぜん(に)」「ふいに」「だしぬけに」「とつじょ」「にわか」<sup>1</sup>と同じく、「突発性」<sup>1</sup>を持つ時間副詞である。これらは、仁田(2002)で言えば、「起動への時間量」<sup>2</sup>の「僅少所要型」<sup>3</sup>といったグループに属している副詞である。これは、本稿で言えば「突発性」に相当するものである。

「いきなり」は、(1)のように名詞、また(2)のように形容動詞として用いることはできない。それに対して、(3)のように、「なぐりつけた」を修飾して、副詞として用いることはできる。

(1) \*その青年はいきなりが失礼な言い方をした。

(2) \*教師はいきなりな質問をあげた。

(3) フン先生は、いきなり右手で空中をなぐりつけた。(ブン)

ただ、名詞を修飾できる場合は、次の(4)のように、「いきなりの+名詞」という形で示す。

(4) 彼女はいきなりの失恋で拒食症になった。

また、意味的にみると、(3)は、「ブン先生は、一瞬のうちに右手で空中をなぐりつけた」という意味を表す。このことから、「いきなり」は「事態の実現が瞬時であったさま」を表すと言える。このような意味を持つ「いきなり」には、次の(5)のように言える場合もあれば、(6)のように言えない場合もある。

(5) 母親の顔を見た赤ん坊は、いきなり泣き止んだ。

(6) \*溜め込んだ礼状を、いきなり書き終わった。

(5)(6)にはどのような違いがあるのだろうか。本稿では構文的、また意味的な考察から、「いきなり」の意味・用法を明らかにしていく。

<sup>1</sup>「突発性」とは、本稿では「行為の受け手が予測・予想・期待していなかったことが一瞬のうちに起きる」ことを意味している。

<sup>2</sup>「起動への時間量」について、仁田(2002)では「事態が生じるまでの時間量、事態への取り掛かりまでの所要時間に関わるものである。」と説明している。「すぐ」「たちまち」等は、その代表として用いられる副詞である。

<sup>3</sup>「僅少所要型」とは、仁田(2002)では「事態の取り掛かり・起動までに要する時間量がきわめてわずかであることを表すものである。」と説明されている。

## 2 先行研究

「いきなり」については、國廣(1982)、森田(1989)、飛田・浅田(1994)では、次のように説明されている。

まず、國廣(1982)は、「だしぬけに」との比較で「いきなり」を取り上げている。そして、「いきなり」は、「ある事態が成立する前に一般的に想定される状況を経ずにその事態が成立する」ことを表し、「その行為の影響を受ける人間の側に視点がある」という特徴があることを指摘している。また、その行為が話者自身によるものである場合は、「行為が相手に与える印象(影響)を、相手の立場に立って述べ」るとき(「あいさつもせずにはいきなり用件を切り出した」)や、その「行為の影響を受けるのは話者自身であるとき(「いきなり熱い風呂に飛び込んだのでやけどしてしまいましたんですよ」)に用いられる、としている。

森田(1989)は、「いきなり」について、「ある状況の流れを経ずに、突然ある行為を起こすこと。行為の順序を無視して、急に状況の流れとは無関係な他の事柄に突入するため、観察者や受け手にとっては、予想もつかぬ事柄を相手が突然起こしたと映る。本来は意志的動作の動詞に係る」こと、「行為者にとって予想できなかった状況の急変、たとえば、「彼はいきなり顔面蒼白になって倒れた」は、意志的な行為ではないが、受け手・観察者側にとっては予想できなかった状態の突発なので、やや落ち着きは悪いが、「いきなり」を使うことができる」こと、「自然現象「いきなり大粒の雨が落ちてきた」「物事がいきなり起こる」なども、あくまで受け手側の意識として「いきなり」を用いている」ことは述べている。

飛田・浅田(1994)は、「前段階をふまずに直接次の段階の行動を起こす様子を表す。ややマイナスイメージの語。」とし、また「予想しない事態が起こる様子を表す。ややマイナスよりのイメージの語。行為の受け手が予想していないというニュアンスで、驚きと衝撃の暗示がある。主体の意志には関係しない。」ともしている。

以上の記述をまとめると、「いきなり」は、行為の順序を無視して、観察者や受け手にとっては、予想しない事態が瞬時に起こる様子を表す副詞であり、またその行為の影響を受ける人間、つまり行為の受け手の側に視点がある、ということが言える。ただし、このような特徴は次の(7)を説明できない。

(7) 結婚を前提に付き合っているとは聞いていたが、いきなり籍を入れたという連絡があつて驚いた。

(7)では、友達には結婚を前提に付き合っている相手がいることは、話し手にとっては既に分かっているが、いつ結婚するかは分かっている。この、

「籍を入れたという連絡がある」のように、既に予想されていたことでは、「いきなり」を用いることができる。このことから、先行研究の解釈には不十分などころがあると言える。

本稿では、構文的・意味的に「いきなり」の特徴を明らかにする。構文的にみる場合は、文末の述語と意志性の有無から、意味的にみる場合は、時間が絡んでいるかどうかから考察していく。

### 3 構文的な特徴

#### 3-1 文末の述語について

##### 3-1-1 文末の述語に現れた特徴

「いきなり」文にはどんな述語がくるかをみると、次のようになる。

まず、「いきなり」の文末には、(8)～(11)の「いる、優れる、しっかりする、接する」のように、動作・変化を伴わず、形容詞的性格を持つ静態動詞は来ないが、(12)(13)の「言う、なる」のように、動作・変化を伴う運動動詞はくる。

(8) \*彼はいきなり殺人現場にいた。

(9) \*彼は頭の回転がいきなり優れている。

(10) \*彼はいきなりしっかりしている。

(11) \*その島はいきなり大陸に接している。

(8)の「いた」は存在を表す動詞であり、(9)の「優れている」と(10)の「しっかりしている」は属性・性質を表す動詞であり、(11)の「接している」は空間的配置・位置を表す動詞である。これらは、工藤(1995)で言えば、いずれも静態動詞に属しているものである。

(12) 「オシゲ、金あるか」男はいきなり言った。(あすなる)

(13) 目の前がいきなり暗くなった。顔面に布がかぶさったのである。(二条)

(12)の「言った」は動作を表す動詞であるが、(13)の「なった」は変化を表す動詞である。これらは、動作・変化を表す運動動詞である。

「いきなり」は、(8)～(11)のように静態動詞と共起できず、(12)(13)のように運動動詞と共起できる、ということから、「運動性」が必要であると言える。しかし、(14)～(16)のように、動作・変化を伴う動詞であっても、共起できない場合もある。

(14) \*彼はいきなりその老人のことを同情した。

(15) \*彼女はいきなり進路を悩んだ。

(16) \*彼はいきなりペットの死を悲しんだ。

airiti

(14)の「同情する」、(15)の「悩む」、(16)の「悲しむ」は、工藤(1995)で言えば、内的情態動詞である。これらが非文になるのは、人の内的な気持ちと感情は、運動性が乏しく、外的な観察でいつ始まるかが分からないからである。このような内的情態動詞によって表される動作・変化は、空間内で起こる外的な動作・変化ほど限界性が明瞭ではない。よって、「限界性」も欠かせない要素の一つである。このことは、次の(17)～(19)からも証明できる。

(17) \*彼女はいきなり田舎に住んでいる。

(18) \*彼女はいきなり太っている。

(19) \*人口はいきなり増えている。<sup>4</sup>

(17)の「住んでいる」は「彼女の田舎での生活が(長く)続いている状態」を、(18)の「太っている」は「太った体型を(長く)維持している状態」を、(19)の「増えている」は「人口数の増加が(長く)続いている状態」を表す。(17)の「住む」は存在を表す動詞であり、(18)の「太る」と(19)の「増える」は漸進的な量の増減を表す動詞である。これらに共通しているのは、限界性がないということである。

このようにみると、文末の述語には「運動性」「限界性」が要求されていることが明確になった。ただ、その「限界性」は、終了限界でなく、開始限界をさしているのが普通である。それは、次の(20)～(22)をみてわかることである。

(20) 黙っていた彼はいきなり言った。

(21) 料理ができない彼女はいきなり中華料理を作った。

(22) 彼はいきなり窓ガラスを割った。

(20)の「言った」は「言い始めた」を、(21)の「作った」は「作りおわった」でなく、「作り始めた」を、(22)の「割った」は「割った」その一時点を意味している。(20)の「言う」は限界性を持たない動詞である。それに対して、(21)の「作る」と(22)の「割る」は限界性を持つ動詞であるが、(21)の「作る」は開始限界と終了限界の両方を持つ動詞であり、(22)の「割る」は開始限界と終了限界が同一である動詞である。これらは、「いきなり」と共起すると、いずれも開始限界をさしている。ただ、限界性が明瞭でない場合は、(23)(24)のように、「～だす」「～はじめる」と共起することによって、許容度が高くなる。

<sup>4</sup> 「人口はいきなり増えている。」は一回の出来事なら非文となる。もし、ここ数年間の人口変化についてのグラフを見比べることを前提とすると、「人口はいきなり増えている。」は非文とならない。それは、数年間の人口変化の流れから、人数が急に増えている年が目に見えるからである。

(23) 彼はいきなり将来のことを{悩みだした／悩みはじめた}。

(24) 黙っていた彼はいきなり{言いだした／言いはじめた}。

(23)の述部「悩む」は、外部からの観察で捉えにくい人間の内面的な感情である。しかし、「～だす」「～はじめる」というアスペクト形式にすると、観察者によって、開始限界が判断される。また、(20)の、限界性を持たない「言う」は、(24)のように「～はじめる」「～だす」というアスペクト形式と共起すると、「言いだした」または「言いはじめた」局面が示されている。このようにみると、限界性が明瞭でない場合は、「～だす」「～はじめる」との共起で、限界性が具体的に生じるようになると言える。

### 3-1-2 アスペクトからみた特徴

アスペクトからみると、文末の述語は、完成相((25))、継続相((26)(27))、パーフェクト相((28))、起動相((29))で表すことができる。

(25) 日本語をいくらか理解する一人のドイツ人によって、その小屋に起きたあらましのことが知らされると、一人のドイツ人は、首を傾げ両手を大きくひろげて困ったことだという表情をした。一人のドイツ人は、いきなり腹を切る真似をした。(孤高)

(25)は「いきなり」によって、「腹を切る真似をした」ことが「突発的」であったことが示されている。このような完成相で表す場合は、その動詞の語形は「する」形でなく、「した」形である<sup>5</sup>。

(26) 少年は教室へ入るなり、いきなり自分の机の中をゴソゴソ探しまわっている。

(27) いきなり女が、背景から切りとられた、輪廓だけの存在になっている。(砂の女)

(26)の「ゴソゴソ探しまわっている」は継続している動作である。(27)の「背景から切りとられた、輪廓だけの存在になっている」は「背景から切りとられた、輪廓だけの存在になった」後の状態を表す。(26)(27)のように「している」形で継続相を表す場合は、「動作継続」と「結果継続」のどちらも表すことができる。また、

(28) ミドル級の体重では苦しくなり、WBCが新設したクルーザー級に転向した鈴木は、いきなりその世界四位にランクされていた。(一瞬)

<sup>5</sup>「する」形でも、「\*彼がいきなり暴言を吐く。」のような一回的な出来事を表す場合ではなく、「彼はいきなり暴言を吐く。」のような性質・属性を述べる場合は、非文とならない。

airiti

(28)は、「ランクされる」ことを完成的に捉えて、その後の効力が続いていることを示す例である。(28)のように「している」形で表すのは、パーフェクト相である。

(29) a. 太郎はいきなり電話をかけ始めた。「どこへかけるの？まだ、六時半よ」母が注意した。(太郎)

b. ジョバンニは、なんとも云えずさびしくなって、いきなり走り出しました。(銀河)

(29 a)の「かけ始めた」と(29 b)の「走り出した」は、「～はじめる」と「～だす」といった起動相と共起して、出来事を完成的に捉えるものである。このように起動相と共起すると、動作・変化の開始限界が明示されることがより明確になる。

一方、文末の述語は、終了相((30))では表しにくい。

(30) \*立ち読みをしていた新聞を、いきなり読み終わった。

(30)の「読み終わった」は出来事を完成的に捉えて、終了限界をさすものである。この場合は、非文となるが、次の(31)のような場合は、非文とならない。

(31) お腹が空いている赤ん坊は、ミルクをみると、いきなり泣き止んだ。(31)の「泣き止んだ」は「泣く」という動作を完成的に捉えて、終了限界をさすものである。(30)と(31)の違いは、(30)の「～おわる」が、何らかの目標をもって仕事することを表すのに対して、(31)の「～やむ」は自然現象、あるいは人の動きでも無意識的な、あるいは衝動的なものに用いられるものである、ということにある。「いきなり」と共起すると、(30)が非文となるのは、何らかの目標をもって仕事をする、という「～おわる」の意味には「突発性」がないからである。これは、「いきなり」の持っている意味的な特徴、つまり「突発性」と関わっていると言える。

このようにみると、「いきなり」を用いる文では、出来事を完成的に捉える場合が多いこと、また完成的に捉えるときは、終了限界より開始限界を示す場合が多いこと<sup>6</sup>が重要である、と言える。

3-1-1と3-1-2から、「いきなり」を用いる文は、基本的に完了した事態を表すと言える。また、継続的に捉えられることと、終了限界をさしにくいとがさすこともできなくはないことは、「いきなり」のもっている「突

<sup>6</sup>今回収集した用例には、アスペクト形式と共起する例が、22例あった。「始発」の局面を表すアスペクト形式と共起する例は20例であるが、「終了」の局面を表すアスペクト形式と共起する例は2例のみであった。このことから、「いきなり」は「始発」の局面を表すアスペクト形式と共起しやすいと言える。

発性」の度合いが希薄であることと関わっていると言える。

### 3-2 意志性の有無からみた特徴

「いきなり」を用いる文には、(32)のように意志性を持つものが多く、(33)のように意志性を持たないものは少ない<sup>7</sup>。

(32) 三千子はぼんやり見送っていたが、いきなり彼のあとを追った。このままだまって帰してはならないような気がしたのだ。(虹)

(33) 彼は腹の中にナイフを抱きこむような恰好で膝をついた。次には崩れるように俯せに倒れた。いきなり静寂が戻ってきた。(影)

(32)の「彼のあとを追った」ことは、主体の「三千子」の意志的な行為である。それに対して、(33)の「戻ってきた」ことの主体は意志性を持たない「静寂」である。このような意志性を持たない場合は、次の(34)のように、人間がその背後に含意されているものもある。

(34) 雄介は顎を無意識にこすった。「どうするかなって、どういう意味よ?」いきなり須麻子の声に、金属的な驚きが混った。(電話)

(34)では、「金属的な驚きが混った」は無意志的な動作であるが、人間によって行われることであるという理解が裏にある<sup>8</sup>。

今回収集した実例には意志性を持つものが多いことから、「いきなり」を用いる文は、人為的に何かを瞬時に起こす事態を表す傾向があると言える。

## 4 意味的な特徴

「いきなり」には、次のAとBのような意味的な特徴がある。

### A. 時間が絡んでいる「突発性」の場合

「いきなり」は、(35)(36)のように事態が予想されているかどうかと関わらず、用いることができる。

(35) 長い間音信不通だった友達がいきなり訪ねてきた。

(36) 外国で生活している友達から近いうちに訪ねたいと言われていたが、いきなり訪ねてきてびっくりした。

(35)では、「長い間ぜんぜん連絡していなかった友達が訪ねてきた」ことは話し手にとっては思いもしなかったことである。このような場合は、予想していなかった事態が思いがけず起こってしまうことを表す。一方、(36)は、

<sup>7</sup>今回収集した用例には、意志性を持つ例が272例、意志性を持たない例が105例あった。このことから、「いきなり」を用いる文には意志性を持つものが多いと言える。

<sup>8</sup>意志性を持たない105例の中で、その背後に人間によって行われることを表す例は62例ある。



airiti

近いうちに訪ねたいということは、外国で生活している友達に言われていた  
ので、いつか訪ねてくると予想していた、という例である。このような場合  
は、予想されていた事態が話し手が思っていたより早く起こってしまうこと  
を表す。(35)(36)では、「いきなり」が使えることから、事態が予想されて  
いたかどうかと関わっていないと言える。

このように、事態が話し手が思っていたより早く起こってしまうことも表  
すことができる、ということから、「いきなり」の使用には、事態が予想さ  
れているかどうかは関係ないと言える。このことは、森田(1989)の「行為の  
順序を無視して、急に状況の流れとは無関係な他の事柄に突入するため、観  
察者や受け手にとっては、予想もつかぬ事柄を相手が突然起こしたと映る  
(下線は筆者)」と、飛田・浅田(1994)の「予想しない事態が起こる様子を表  
す」といった記述では説明が不十分であるところがあると言える。

また、意外・驚きなどのようなニュアンスについては、(35)(36)のような  
例では、「長い間音信不通だった友達」「外国で生活している友達から近いう  
ちに訪ねたいと言われていた」が意外・驚きなのではなく、むしろ「長い間  
音信不通だった」「訪ねてきた」の結びつき、「外国で生活している友達か  
ら近いうちに訪ねたいと言われていた」「訪ねてきてびっくりした」の結び  
つき、つまり順序を飛ばした二つの行為の間から生じたものである。

#### B. 時間が絡んでいない「突発性」の場合

「いきなり」には、(37)(38)のように、時間が絡んでない場合がある。

(37) その小説の話はいきなり半ばで切り替わっている。

(38) 富士山の雪解け水はここでいきなり途切れている。

(37)では、「その小説の話は半ばで切り替わっている」ことは、作家が既に  
起してしまったことである。読者である話し手は、その小説を読んでいくう  
ちに、半ばで切り替わっていることに気付いた。(38)の「富士山の雪解け水  
はここで途切れている」ことは、ずっと前からあったことである。話し手は、  
道を歩き回っているうちに、「ここで途切れている」ことを発見した。

(37)(38)のように、発話時点より前から起こってしまっていた事態に、話し  
手が発話時に気付く、あるいは発見するような場合は、「いきなり」を用い  
ることができる。この場合は、話し手の認識では、事態がいつ発生したかを  
考えずに、その現状に突発的に気付いて述べるのである。

AとBをみると、「いきなり」には、時間が絡んでいる場合は、予想して  
いたかどうかと関係なく、事態が突発的に起こるが、時間が絡んでいない場  
合は、話し手が現状に突発的に気付いて述べることが重要であると言える。  
また、國廣(1982)、森田(1989)、飛田・浅田(1994)で示されているように、

airiti

行為の順序を飛ばして、事態は瞬時に発生することも重要であると言える。

## 5 まとめ

以上、構文的、また意味的に考察してきた「いきなり」をまとめると、次のようになる。

時間が絡んでいる場合は、「いきなり」には、予想していたかどうかと関係なく、行為の順序を飛ばして瞬時に発生する事態を表す、という意味的な特徴がある。この意味が、完了した動的事態を表し、しかも文末の述語に「運動性」と「限界性」があること、また意志性を表すものが多い、という構文的な特徴が見られる。また、継続相と共起できることから、行為の順序を踏まないことによって、事態を丸ごと捉える「突発性」の度合いが希薄になる、ということも考えられる。これは、これまでの研究では論じられていないことである。

時間が絡んでいない場合は、「いきなり」には、事態の発生時に焦点を置かないで、話し手が現状に突発的に気付いて述べる、という特徴がある。

このように、「突発性」を表す時間副詞には、「いきなり」の他に、「だしぬけに」「とつじょ」「とつさに」などがある。これらは、類義関係はあるが、必ずしも同じ意味合いで使用される副詞ではないと思われる。「突発性」を表す副詞同士の関係性については、今後の課題として考察していくことにする。

## 参考文献

- 金水敏・工藤真由美・沼田善子(2000)『時・否定と取り立て』岩波書店  
工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』ひつじ書房  
國廣哲彌・柴田武・長嶋善郎・山田進・浅野百合子(1982)『ことばの意味3 辞書に書いてないこと』平凡社  
寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版  
仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房  
〃 (2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版  
飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』東京堂出版  
森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店

使用テキスト(本文中で注記のないものはネイティブによる作例である。)  
あすなる=井上靖『あすなる物語』, 一瞬=沢木耕太郎『一瞬の夏』, 銀河=

airiti

宮沢賢治『銀河鉄道の夜』, 孤高=新田次郎『孤高の人』, 砂の女=安部公房『砂の女』, 太郎=曾野綾子『太郎物語』, ブン=井上ひさし『ブンとフン』  
…以上 CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊, 影=夏樹静子『影の鎖』集英社(1977),  
電話=森瑤子『あなたに電話』中央公論社(1991), 虹=原田康子『虹』集英社(1989), 二条=杉本苑子『二条の後』集英社(1989)